



東北大学

平成 18 年 9 月 13 日

報道機関各位

東北大学大学院医学系研究科

**緑茶摂取と全死因死亡・循環器疾患死亡リスク低下が関連することを発見
緑茶摂取がヒトに与える効果の大規模コホート研究で確認**

東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野・栗山進一助教授、同・辻 一郎教授らのグループは、緑茶を多く飲んでいる人では、全死因死亡・循環器疾患死亡リスクが低いことを発見した。がん死亡リスクとは関連しなかった。この研究成果は、米国医師会雑誌「JAMA-the Journal of the American Medical Association」（米国時間 9 月 13 日）に掲載予定である。

緑茶に含まれるポリフェノール、特にエピガロカテキン・ガーレートには循環器疾患やがんに対して防御作用があることが、細胞レベルや動物実験で盛んに研究・報告されてきた。しかしながらヒトを対象とした研究は少なく、一致した結論が得られていなかった。同グループでは、宮城県大崎地方に居住する 40-79 歳の 40,530 人（男性 19,060 人、女性 21,470 人）を対象に大規模前向きコホート研究を行っており、1995 年から全死因死亡については 11 年間、死亡原因については 7 年間追跡調査を行っている。今回 1994 年のベースライン調査での緑茶摂取に関する回答をもとに、対象者を緑茶摂取 1 杯未満/日、1-2 杯/日、3-4 杯/日、5 杯以上/日の 4 群に分け、その後の死亡リスクを算出した。その結果、男女とも緑茶を多く摂取するほど全死因死亡リスクが統計学的に有意に低下し、リスクの低下は特に女性で顕著であった。緑茶摂取 1 杯未満/日群と比較すると、5 杯以上/日群ではリスクは男性で 12%、女性で 23%、それぞれ低下していた。循環器疾患死亡ではこうした関連がより強くみられ、リスクは男性で 22%、女性で 31%、それぞれ低下していた。循環器疾患の中では脳血管障害で特にリスクの低下がみられ、脳血管障害の中では脳梗塞でリスクの低下が顕著であった。緑茶摂取とがん死亡リスクとは関連がみられなかった。

本研究成果は、緑茶摂取が脳梗塞などの動脈硬化性疾患リスクを低下させ、ヒトの寿命を延伸させる可能性を示したもので、公衆衛生上の意義が大きい。また、今後緑茶に含まれる有効成分の特定によって、動脈硬化の予防・治療に対する応用が期待される。

(お問い合わせ先)

東北大学大学院医学系研究科・公衆衛生学分野

担 当：栗山 進一 (クリヤマ シンイチ)・助教授

電話番号：022-717-8123

E-mail: kuriyama-thk@umin.ac.jp